

特別活動

松田 隆之
小野 義幸

学級や学校の生活をよりよくするための活動を充実させ、
自己有用感を高める特別活動の展開

I 特別活動研究の方向性

1 主題設定の理由

特別活動においては、児童同士の話し合い活動や、児童が自主的、実践的に活動することを特質としてきました。特別活動における「主体的・対話的で深い学び」とは、各活動、学校行事の学習過程において、授業や指導の工夫改善を行うことで、一連の学習過程の中での質の高い学びを実現することです。それは、特別活動の各活動、学校行事の内容を深く理解し、それぞれを通して資質・能力を身に付け、小学校卒業後も能動的に学び続けるようにすることでもあります。

これまでの本校の研究では、能動的に問題発見、合意形成、協力実践できる力を自治的能力と押さえ、研究を進めてきました。主に学級活動を中心として取り組む中で、問題発見から合意形成及び意思決定、協力実践に至るまでの学習過程の在り方を構築し、自己評価の蓄積から自らの成長を実感することができました。一方で、決まったことの詳細を練ったり、振り返りをしたりする時間の確保と、相互評価によるお互いの認め合いの場の設定が十分ではなかったため、次の活動へ向けた追究意欲の持続に課題が残りしました。さらには、学級活動以外の各活動と学校行事において、研究の検証をする機会を充実させていく必要があります。

本校の児童は、学校行事や児童会活動、クラブ活動に熱心に取り組み、教職員も児童の主体性が発揮される活動となるように指導をしています。また、学級活動では、児童が中心となって進める学級会に計画的に取り組み、学級生活の充実と向上を目指しています。

全体研究主題では、「探究する子供を育てる教育活動の創造」をテーマとしています。特別活動における探究とは、学級や学校の生活をよりよくするために、問題の発見・確認、解決方法の話し合い、決めたことの実践、振り返りまでの一連の学習過程のサイクルを繰り返すことと押さえました。繰り返すためには、事前、本時、事後の活動を一つの活動とし、そこで得た力を次の新たな活動につなぐ原動力とすることが求められます。そのためには、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れることを通して、社会性の基礎となる自己有用感を高める必要があると考えました。

そこで、研究主題を「学級や学校の生活をよりよくするための活動を充実させ、自己有用感を高める特別活動の展開」と設定しました。「学級や学校の生活をよりよくするための活動」とは、よりよい集団や学校生活をつくることを目的に、様々な構成の集団から学校生活を捉え、課題の発見や解決を行う活動のことです。「自己有用感を高める」とは、児童が自発的、自治的な活動を通して、互いに協力し合い認め合う中で、自分が他者の役に立つ存在であることを実感し、自分のよさや可能性を発揮して自信をもつことと、他者との関わりや評価によって自分が必要とされていることを実感することです。

2 目指す児童の姿とその具体

自発的、自治的な活動を通して、集団の中で自分の役割を果たし、認め合う児童

「自発的、自治的な活動」とは、児童自ら学級や学校の問題を発見したり、集団としての意見を合意形成したり、決まったことを実践したりすることです。

「自分の役割を果たし、認め合う」とは、一部の児童だけでなく、全ての児童が役割を果たすこと（貢献）を経験し、活動の成果を児童相互に認め合い、集団の一員として認められている（承認）という満足感や充実感、連帯感などをもつことです。また、このような支持的風土の醸成と並行して、一人一人の主体的な意思決定に基づく実践ができる子の育成を目指します。

II 研究内容の具体

2年次は、特に学級活動〔主として(1)〕について重点化を図り、身に付けた資質・能力を学級活動(2)(3)、学校行事、児童会活動、クラブ活動に生かすことができるよう研究を進めました。

1 事前の活動と本時の活動内容の工夫

特別活動において育成を目指す資質・能力は、事前から事後までの一連の学習過程の中で育まれるものです。したがって、それぞれの学習過程においてどのような資質・能力を育もうとするのかを明確にした上で、意図的・計画的に指導に当たることが求められます。そのためには、本時の前後の活動を指導計画に位置付け、一体的に捉える必要があります。また、学級活動において自己有用感を高めるためには、貢献へとつながるような意欲付けが必要です。具体的には、まず、事前に個々の思いや学級(学校)の実態を基にして、学級の総意によって議題を設定します。さらに、計画委員会の打合せの中で、提案理由と話し合いのめあてを明確化した上で、網羅的にならぬよう話し合いの内容を重点化しておくことが大切です。

○提案理由の明確化と話し合いのめあての設定

- ・何のためにこの議題について話し合うのか
- ・話し合うために必要な視点は何か

○5W1H(Why/What/Who/Where/When/How)の重点化

- ・例) Howを重視した話し合いとするならば、それ以外は事前に決めておくか短時間で決める。

2 自発的、自治的な活動を充実させる指導の工夫

特別活動において自己有用感を高めるためには、その活動が自発的、自治的な活動であることが重要な要素です。そのために、児童がよりよい学級や学校の生活を築くための問題を発見したり、集団(個人)としての意見をまとめたり、友達と協力して(または個人として)実践したりする過程における適切な指導や環境づくりが大切です。

○話し合い活動における指導助言の工夫

- ・指示的な助言
- ・問題解決のための助言
- ・援助や補足的な助言
- ・再考を促す助言
- ・承認や激励の助言
- ・発言を価値付ける終末の総評

○合意形成や意思決定の工夫

- ・合意形成の在り方【学級活動(1)、児童会活動、クラブ活動、学校行事】
- ・よりよい解決方法、努力事項、「なりたい自分」等の話し合い活動の場の工夫

【学級活動(2)・(3)、学校行事】

○思考の可視化・操作化・構造化の工夫

- ・賛成反対マーク
- ・小黒板
- ・短冊
- ・思考ツール
- 等

3 自己有用感を高める相互評価の工夫

自己有用感を高めるためには、一連の学習過程の中で、集団の成員相互による相互評価や集団の成員外からの他者評価を取り入れ、自分と他者(集団や社会)との関係を自他共に肯定的に受け入れることが大切です。

そこで、自己有用感を構成する要素として、「貢献」と「承認」を関連付けました。「貢献」とは、「他者や集団に対して自分が役に立つ行動を示している」という状況であり、「承認」とは、「他者や集団から自分の存在が認められている」という状況と押さえました。「貢献」を一連の学習過程に位置付け一人一人が活躍できる状況を作り、それを基にした「承認」(他者評価)と自己評価によって自己有用感を高める研究を進めました。

<2年次研究の重点>

- ・提案理由の明確化と話し合いのめあての設定
- ・自己有用感を高める相互評価の工夫

Ⅲ 研究実践

6年生実践 『学級ポストから（学級や学校における生活づくりへの参画）』

実践のテーマ：議題の提案理由と話し合いのめあてを明確にし、
話し合いや相互評価をとおして、活動へ向けて意欲を高める学習

1 研究授業のねらい

本活動では、お世話になった附属小学校へ感謝の思いを伝えるための取組内容について考え、積極的に意見を述べたり、合意形成をしたりするとともに、役割や責任を果たして自発的に集団活動に参画しようとする態度を育成することをねらいとしました。本学級の事前調査から、約9割の児童が級友のことを信頼し、自分は支えられていると感じている反面、半数以上の児童が学級内における自分の存在を肯定的に捉えていない傾向にあることが分かりました。このことから、安心して議長団を務められるよう事前準備に計画的に取り組むとともに、自己有用感の高まりを通して自己肯定感を獲得できるような活動のサイクルを充実させることが必要であると考えました。本時では、お世話になった附属小学校への感謝の気持ちを表すための取組を話し合いました。提案理由と話し合いのめあてを土台とし、相手意識や目的意識を大事にしながら話し合いをすることで、質の高い合意形成ができるように働き掛けました。

2 活動の指導計画

時	主な活動内容	自己有用感を高める児童の姿
事前	<ul style="list-style-type: none"> ・計画委員会① 学級ポストに出された提案から、学級に必要と思われる内容をいくつか全体の場で提示し、学級の総意で一覧表を作成する（今後の議題と日程）。 ・計画委員会② 本時の役割分担と議題の提案理由を考える。提案理由は、担任の助言を受けながら議題提案者の思いを汲み必要に応じて加筆する。 ・事前の意見交流 本時に向けて、次の議題と提案理由を掲示しておき、相談ボードを利用して自由に意見表出ができるようにしておく。 	<p>学級内での課題や自分たちの生活をよくするために必要なことを見い出して学級ポストや相談ボードを利用して構想している姿。</p>
本時の活動	<p><学級活動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・議長団は、決まっていることや制約を確認し、本時の進め方について説明する。 ・議題について、提案理由と話し合いのめあてに基づいて話し合い、学校やお世話になった方への感謝の伝え方を決定する。 ・学級会の振り返りをする。 	<p>友達の考えを認めたり、よさを生かしたりしながら、合意形成を図り、お互いの頑張りを認め合う姿。</p>
事後	<p><事後の活動>学校やお世話になった方へ感謝を伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級会で決まった内容を必要に応じて他に周知し、細かい内容を調整し実践する。 ・活動の振り返りをする。 	<p>ねらいの達成度合いを考えたり、よい点や改善点を見付け出したりするとともに、新たな課題を設定している姿。</p>

3 本時の活動

(1) 本時の目標

お世話になった学校へ感謝の気持ちを表すための取組内容について、提案理由と話し合いのめあてを意識しながら話し合い、合意形成に関わろうとするとともに、友達の頑張りを肯定的に評価している。

(2) 本時の展開

活動の流れ	活動内容と主な活動	研究との関わり・留意点
事前の取組	<ul style="list-style-type: none"> ○学級ポストや朝・帰りの会で話し合いたいことを提案する。 ○計画委員会が、議題として取り上げるものを決定する。 ○決まった議題の提案理由を掲示し、学級内で周知する。 ○ボード上で簡単な意見交換をする。 	<p>◇提案理由の明確化と話し合いのめあての設定 研究視点1</p>
本時の活動 1 意識化・共通化 2 追求・解決 (1) 解決に向けた視点の表出 事前に計画委員会で整理しておく	<p>◎議題の提示</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px; text-align: center;">学校に感謝を伝える方法を考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○提案理由の確認 ○事前に決まっていることの確認 ○話し合いのめあての設定 ○話し合いの流れを確認する <p>[Who] ①誰に対して</p> <p>[What/How] ②内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何を、どのように <p>[Why] ③活動の意味</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何のために行うのか。 ・提案理由や話し合いのめあてに合致しているか。 ・どのような力が身に付くか。 	<p>・校内の清掃については、卒業プロジェクトの学校奉仕実行委員が中心になって企画する。</p> <p>・それぞれの取組の担当者は、卒業プロジェクトの仕事が終わった人から順次決めていく。</p> <p>・家族には、感謝の手紙を書く。</p> <p>・教師は、必要があれば適切なタイミングで助言する。</p>
(2) 内容を決定する話し合い	<ul style="list-style-type: none"> ○個人で考え、全体で交流する。 ・分類したり合わせたりしながら、折り合いを付けていく。 	<p>イ【思考力・判断力・表現力等】</p> <p>学校への感謝の内容について話し合い、多様な意見を認め合いながら合意形成をしている。 (グループや全体での発言・観察)</p>
3 実践への意欲化	<ul style="list-style-type: none"> ○決定したことを確認し、学習の振り返りをする。 ・相互評価と自己評価を行う。 	<p>◇自己有用感を高める相互評価の工夫 研究視点3</p> <p>◇話し合い活動における指導助言の工夫 研究視点2</p> <p>・発言を捉えた総評をする。</p>
事後の取組	<ul style="list-style-type: none"> ○朝や帰りの会を利用して、本時に決められなかった細かい部分を検討する。 ○実践後に相互評価をする。 ○実践の成果や過程を振り返る。 	<p>・活動前、活動中、活動後に、称賛や励ましの声掛けをし、意欲付けを図る。</p>

◇授業の見所・本時で願っている児童の姿

お世話になった学校へ感謝をするための取組内容について、自分なりの考えをもって合意形成に関わり、友達の頑張りを肯定的に評価している姿。

4 授業の実際

提案理由の明確化と話し合いのめあての設定

社会参画に必要な資質・能力を身に付けるためには、学級や学校の生活をよりよくするための活動の話し合いが目的から逸れないようにするとともに、内容に具体性をもたせる必要があると考えました。そこで、学級会での話し合いの論点を定めることをねらい、事前の活動を指導計画に位置付け、計画的に指導しました。

①議題の選定 計画委員が学級ポストに寄せられた意見を集約し、短学活で学級会の議題を決定する。	計画委員 学級の児童全員
②提案理由の明確化 決定した議題の提案者が、提案理由を考える。話し合いの目的が分かりにくい場合は、教師が関わる。	提案者 教師
③話し合いのめあての設定 提案者が考えた提案理由を受けて、「何のために話し合うのか」という視点で、話し合いのめあてを設定する。話し合いのゴールのイメージが明確になっていない場合は、教師が関わる。	議長団 提案者 教師



【提案理由と話し合いのめあてを明確にした本時の板書】

○提案理由1回目(例)

「お世話になった附属小学校に喜んでもらえるような恩返しをしたいから」

▽教師の助言(例)

「その取組によって、6年1組のみんなにとってどのような成長(プラス)があるでしょうか。もう少し踏み込んで、その部分も含めた提案理由にしてみましょう。」

○提案理由2回目(例)

「お世話になった附属小学校に喜んでもらえるような恩返しをすることで、感謝の心を伝えるときともに、感謝する心をこれからの生活につなげたいから。」

本時では、「在校生に感謝を伝えるための方法」として、「感謝の気持ちを寄せ書きにする」「体育館でのレク

リエーションを計画する」という2案に絞られました。賛成する理由や心配な点を話し合うものの合意形成が図られなかったときに、議長が提案理由や話し合いのめあてに立ち返り、「感謝を伝える相手である在校生が嬉しいと感じる方法はどちらですか。」とフロアーに問いました。その問いに対する、「今年には特に在校生と関わることも難しかったし、在校生も私たちとの交流を望んでいると思います。」という考えをきっかけに、『ありがとう』という言葉伝えるだけでなく、自分たちがレクリエーションを進める姿を見せることも大切だと思います。」といった自分たちの役割に着目した考えに発展し、最終的に「在校生との交流」を進めることになりました。

活動後の児童の振り返りを見ると、右記のように話し合いの内容の深まりを実感していた児童が多くいました。また、自分の意見を考えるときや友達の見聞を聞くときに、「提案理

めあてを決めることで、原点に戻って考え直すことができ、めあてや提案理由に沿わないから不安だな、という考えが出てきた。また、提案理由を具体的に示すことで目的やその後、どんな事になっていけばよいのか、を見通すことができた。納得もしやすくなった。

提案理由があることで、そんなに考えることなくスムーズに進んだと思います。また、何を話すべきなのかわかっていることが明確な分、理解がより深まったかなと思いました。また全てがそろった状況で、たまたま自分のやるべきことが分かり、ゴールまでのやる気が出ました。こういった思いがみえるに、あたからこいい方向に進んだんだと思える。

【活動後の児童の振り返り】

由や話し合いのめあてに合致しているか」という視点をもって話し合いに臨むことができている児童も多くいました。事前の取組として、提案理由を明らかにし、話し合いのめあてを設定することによって、考えの出し合いに終始することなく、提案理由や話し合いのめあてに立ち返りながら話し合いを進めることができました。

自己有用感を高める相互評価の工夫

自己有用感が高まると、実践への意欲が継続し、次の課題解決につながっていくと考えました。自己有用感は、「他人の役に立った」「他人に喜んでもらえた」等、相手からの肯定的な評価を通して生まれてきます。最終的には自己評価であるとしても、他者からの「承認」は欠かせません。そこで、本活動では、学級会での話し合い後、学級会で決まった取組の実践後に相互評価を設定しました。持続性と即時性をねらい、ロイロノート・スクールを活用し、話し合いにおける意見の内容や実践の様子について文章表記で評価しました。事前に自分の考えを記したワークシートを撮影したものを互いに送信することで、話し合いの場で意見を述べられなかった児童も評価することができます。

活動前は、半数以上の児童が学級内における自分の存在を肯定的に捉えていない傾向にありましたが、活動後23名の児童の自己有用感を示す数値が上昇しました。児童Aは、活動の事前アンケートの時点で、「自分は学級の中で重要な一員ではない」と捉えていましたが、発言した内容が具体的に承認されることで、自己有用感を高めることができました。

〇〇さん
議長団の話をもみんながあまり理解していないときに、発言をして周りを納得させる意見だったのでとても凄かったです。特に「レクによって生まれるものがある」という意見がとても心に刺さりました。〇〇より

〇〇さん
〇〇さんの『レクも寄せ書きも贈ると言う意見』の理由で役割を分けていると思い、その意見で、考え方の視野が広がったと思いました。いつも少し違う視点から考えた意見がすごいと思います。〇〇より

【児童Aへの友達からの評価】

IV 2年次研究の成果と課題

2年次研究では、「提案理由の明確化と話し合いのめあての設定」「自己有用感を高める相互評価の工夫」を重点として研究を進めました。

1 研究の成果

- 提案理由や話し合いのめあてを決めることを事前の活動として位置付けることで、活動の目的やねらいに迫る話し合いをする時間が確保され、話し合いの内容を深めることができました。
- 議長団が話し合いのめあてを考えることで、議長団が話し合いを進める上で意図的な声掛けができるようになり、賛成意見や不安な点を述べる児童が「提案理由に沿っているか」「話し合いのめあてに迫ることができるか」という視点をもつことにつながりました。
- 話し合いの後に相互評価を行うことで、どの児童も承認される機会が保障され、自己有用感を高めることにつながりました。

2 今後の課題

- 学級活動（1）における話し合いの進め方や意見の述べ方などについて、学年の発達段階に応じた指導の在り方を明らかにする必要があります。
- 自己有用感を高めるための「貢献」と「承認」のサイクルの有効性について、長期的なスパンで検証する必要があります。

V 参考文献

- 小学校学習指導要領 文部科学省 平成29年3月
- 小学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省 東洋館出版 平成29年6月
- 小学校学習指導要領解説 特別活動編 文部科学省 東洋館出版 平成29年6月
- 楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編
文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター 平成29年9月
- 生徒指導リーフ『『自尊感情』？それとも『自己有用感』？』
文部科学省 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 平成27年3月
- 特別活動で、日本の教育が変わる！ 杉田 洋 稲垣 孝章 小学館 令和2年7月
- 初等教育資料No. 977「特集Ⅱ 新学習指導要領に向けた指導の在り方〔特別活動〕」
東洋館出版社 平成31年1月